研究ノート

ジョージ・A・バーミンガムの短篇小説「発車オーライ」

八　幡　雅　彦

A Japanese Translation of George A. Birmingham's Short Story, "Starting the Train"

Masahiko　YAHATA

ジョージ・A・バーミンガム（George A. Birmingham）の本名はジェイムズ・オウエン・ハニー（James Owen Hannay）である。彼は1865年7月16日，北アイルランド・ベルファーストのプロテスタントの家庭に生まれた。

父親ロバート・ハニー（Robert Hannay）はアイルランド国教会牧師で，イギリスに忠誠を誓うユニオニストであった。バーミンガムは，自叙伝『麗しい地』(*Pleasant Places*, 1934)のうちで，父親が彼に授けた徹底したプロテスタント・ユニオニスト的教育に関するエピソードを述べている。バーミンガムがまだ幼児の頃，父親は，当時北アイルランドのオレンジ協会（ユニオニスト強硬派組織）の指導的立場にあったトマス・ドリュー（Thomas Drew）という人物をバーミンガムの家庭教師として雇った。そしてバーミンガムはドリューの膝の上に乗せられ，「くたばれローマ法王。くたばれカトリック神父。絶対降伏しないぞ。万歳！」と繰り返し復唱させられた。[1)]

しかしバーミンガムは後に決してオレンジマンになることはなかった。彼はダブリン大学トリニティー・カレッジの神学部に学び，1888年にはダブリン南部ウィックロー州デルガニーのアイルランド国教会に副牧師として赴任した。1892年にはアイルランド西部メイヨー州ウェストポートで牧師となり，5つの教会で礼拝を執り行った。バーミンガムはここでふとしたきっかけでアイルランドの政治に関心を持つようになり，ナショナリズムに共鳴し，ダグラス・ハイド（Douglas Hyde）に誘われ，彼が率いるゲーリック・リーグ（Gaelic League）の一員となった。[2)]

バーミンガムはゲーリック・リーグを弁護する論説を様々な機関誌に発表し，プロテスタント・ユニオニストの反感を買った。その一方で，『煮えたぎる鍋』（*The Seething Pot*, 1905），『ハイヤシンス』（*Hyacinth*, 1906）という深刻な政治小説を出版し，アイルランド独立の前に立ちはだかる困難を呈示した。このふたつの作品はカトリック・ナショナリストの間で物議をかもし，「バーミンガムはアイルランドを軽蔑するユニオニスト」との誤解を生み，彼はゲーリック・リーグ脱退を余儀なくされた。

代表作『スペインの黄金』（*Spanish Gold*, 1908）を機にバーミンガムはユーモア小説に転向し，ユニオニストとナショナリストの融和を真に願う作品を書き続けた。『ジョン・リーガン将軍』（*General John Regan*, 1913)の舞台である架空の町バリモイはウェストポートが舞台で，主人公オグラディー医師の指揮のもと，住民たちがユニオニスト，ナショナリストの対立を越えて一致団結し，アメリカ人富豪を騙し，寄付金をせしめようとする物語である。この作品の舞台劇がロンドン，ニューヨークで上演さ

れた時，観客たちは「アイルランド人に関する諷刺喜劇」と解釈し，笑い転げ，ロングランの大成功を収めた。しかし1914年２月にウェストポートで上演された時，地元の観客たちは「アイルランド人を侮蔑した」と誤解し，暴動が起き，20人以上の逮捕者が出る騒ぎになった。しかし『ジョン・リーガン将軍』はアイルランド人に関する諷刺でも，アイルランド人を侮蔑したものでもない。ユニオニストとナショナリストの融和に対するバーミンガムの真の願いが溢れ出た作品であり，住民たちを一致団結させ町に利益をもたらせようとするオグラディー医師の八面六臂の活躍は，バーミンガムが理想とする「自己犠牲精神」というキリスト教道徳を具現したものである。事実，バーミンガムは『砂漠の知識』（*The Wisdom of the Desert*, 1904）というキリスト教思想書を著し，４世紀から５世紀にかけてエジプト，パレスチナの砂漠地帯に住んでいた修道士たちの神に仕える自己犠牲精神を賞賛している。

バーミンガム研究の先駆者であるＲ・Ｂ・Ｄ・フレンチは彼の小説を「キリスト教道徳者の作品」と呼び，Ｐ・Ｊ・カヴァナーは「ばかばかしさの哲学」と呼んだ。[3)]　両者の指摘は正しい。確かにバーミンガムのユーモア小説は極めて非現実的で，馬鹿げた出来事の連続だが，「人間同士の融和のためには何事も深刻に考え過ぎるべきではない。笑いの要素が必要だ」という哲学的真理を具現している。その意味では，バーミンガムの小説は，アイルランド問題のみならず，世界中の対立問題の解決にとっては何が必要かを示唆しているといえよう。彼は1946年母校ダブリン大学トリニティー・カレッジより名誉文学博士号を授与され，1950年２月２日84歳の生涯を閉じた。

ここに翻訳紹介する短篇小説「発車オーライ」（“Starting the Train”）は『レディ・バウンティフル』（*Lady Bountiful*, 1921）に収められた15の作品のうちのひとつである。ユーモアに溢れ，ユニオニスト，ナショナリスト双方に対するバーミンガムの善意と，彼らの融和に対する真の願いが滲み出ている。まさに人間同士の融和にとって必要な「ばかばかしさの哲学」を端的に現わした作品である。翻訳のテキストとして用いたのは1921年ロンドン・クリストファー社（Christophers）から出版された初版である。

「発車オーライ」
ジョージ・Ａ・バーミンガム

トム・オドノヴァンは，一等喫煙車両の窓からできる限り身を乗り出していた。

「じゃあね，ジェシー，愛してるよ。明後日には帰って来るからね。遅くともその次の日には帰って来るからね。体に気をつけるんだよ」

オドノヴァン夫人はさほど背が高くはなく，彼が彼女に口づけをする時はつま先立ちだった。

「あなた，ダブリンで夕食をとる時間は十分あるわよね。それとも船に乗ってからにする」

「船でも十分な食事はとれるよ。それに直ぐに船に乗った方が面倒くさくなくていい」

夫人がこの質問をするのは２度目で，彼は同じ答えを繰り返していた。しかし列車の出発を待つ間は何かを喋り続けることが必要で，このような場合滅多に新鮮な話題はないものだ。

「それであなた，マナーズさんには明日の朝会うのよね」しばらく間をおいて彼女は言った。

「10時半の約束だ。ユーストン・ホテルで朝食をとって，マナーズ氏のオフィスへは地下鉄で行く。じゃあね，おまえ」

しかしこの「じゃあね」の言葉は口づけ同様，早まったものだった。列車は出発しなかったのである。

「もしぼくがマナーズ氏と代理店契約を結ぶことができたとしたら，ぼくたちは悠々自適の身分になれるよ。おまえは半年もしないうちに毛皮のコートを着て，大きな車を乗り回すことができるようになるよ」

「なんて素敵なの，あなた」夫人は言った。

「もしマナーズ氏がぼくに代理店をやらせてくれるつもりがないのなら，ぼくをわざわざロンドンまで呼び出したりはしなかっただろう」

マナーズ氏のオフィスで面会のためにロンドンにやって来るようにという手紙がトムに届いて以来，ふたりは何回となくその推論を導き出していた。代理店契約とは，マナーズ氏の発明した機械をアイルランドで販売する独占権を得るということで，それはけた外れの儲けになるということは間違いなかった。そしてトム・オドノヴァンは代理店契約を手に入れたものと信じて疑わなかった。

彼は腕時計に目をやった。

「いったいこの列車は何を待っているんだ」

しかし今日のアイルランドの鉄道の旅客は列車が出発しないことに皆慣れていて，忍耐という教訓を身につけていた。トムは苛立つ様子も見せず待った。オドノヴァン夫人は楽しそうに彼に喋りかけていた。列車はこの駅には十分な余裕を持って到着していた。列車は，郵便船がキングスタウン[4]を出港する２時間前にダブリンに到着する予定だった。何も心配する必要はなかった。

しかし30分が経つとトムはさすがに心配になって来た。45分が過ぎるといてもたってもいられないほど不安になって来た。

「もし列車がすぐに出発しないと」彼は言った。「ぼくは船に乗り遅れて……おいジェシー，これはえらいことになるぞ」

船に乗り遅れるということは翌朝ロンドンでの約束に間に合わないということだ。そんなことになったら……もし，そんなことになったら，マナーズ氏はたぶん代理店契約を他の誰かに与えてしまうだろう。トムは客車のドアを開け飛び降りた。

「車掌に話しに行く。そして何が問題なのか見つけて来る」

車掌は，太った，上機嫌そうな男で，機関士と熱心に話し込んでいた。トム・オドノヴァンは車掌に向かって怒鳴りつけた。

「いったいどうしてこの列車は出ないんだ！」

「この列車は今日は動かないんですわ」

「どうしてなんだ！」

それに答えたのは機関士の方だった。背の高い，重々しそうな男で，あたかも厳粛な場での演説には慣れっこであるかのような口調で，威厳をもって答えた。

「この列車は，現在アイルランド共和国と戦争中のイギリス王国の武装軍人たちを運ぶために使用されるものではありません」

「この駅で兵隊たちが乗ったんですわ」車掌は親しげな，弁解する口調で言った。「今の情勢じゃあ，連中があそこに乗ってる限りは列車を出すことはふさわしゅうないってことなんですわ」

「しかし…ああ，なんということだ！…もしこの列車が動かなかったら，私はキングスタウン発の郵便船に乗り遅れて，それでもし明日の朝ロンドンに着けなかったら私は年に千ポンドの稼ぎのほとんどを失うことになるんだぞ！」

「そりゃお気の毒ですなあ」車掌は言った。「いやあ，紳士の方がそんな損害を被るのはお気の毒なことですわ。でもしょうがないですなあ。今の情勢じゃあ，機関士もワシも兵隊たちが乗ってる限りは列車を動かせないってことなんですわ。妙な時代になったもんですなあ，ホントに」

極端に妙な時代であるという言い訳は，トム・オドノヴァンにいかなる慰めも与えなかった。しかし車掌と議論していても何の役にも立たないと彼には分かった。彼は，心底から思っている意見をぶちまけるにとどめた。

「誰にとっても一番いいことは，イギリス軍も，アイルランド共和国も，くだらぬ戦争も，政治にうつつを抜かしているあらゆる愚か者どもも，全部鍋に入れて煮て，スープにしてしまうことだ！」

そう言って，彼は背を向けて歩き去った。歩き去る時，彼は車掌が彼の意見に穏やかな同意の言葉を述べるのを聞いた。

「そうでしょうなあ。わしゃ，はっきりは言いませんけど，そうなるのがいいかもしれんですなあ」

トム・オドノヴァンは車掌と機関士の説得に失敗し，兵士たちの説得に最善を尽くそうと決意した。彼は，兵士たちに列車から降りるよう説得する自信はなかったが，彼は死に物狂いの

状況だったので，いかなるチャンスも諦める気にはなれなかった。彼は，イギリス軍ウェセックス軽装歩兵隊所属の，身なりの整った若い軍曹と６人の部下たちが三等車両に座っているのを発見した。彼らは弾よけのヘルメットをかぶり，ライフル銃を両膝の間に立てていた。

「軍曹殿」トムは話しかけた。「あなたがたのせいで列車が出発できないのです」

「私の受けました命令は，この列車で……」

「ええ，あなたの受けた命令のことはすべて良く存じております。しかしお考えになってみて下さい。なにもこの列車ではなくても，次の列車を止めて下さってもよろしいと思うのですが。２時間後に次の列車がございます。それに乗って一晩中過ごすこともできます。しかし，この列車を出発させて下さらないと，私はキングスタウン発の船に乗り遅れて，もし明日の朝ロンドンに着くことができなければ千ポンドの年収を失ってしまうのです」

「まことにお気の毒であります」と軍曹。「しかし命令でありますから。特に紳士の方がひどい迷惑を被っておられる場合には，私は喜んでお助けしたいと思うのでありますが。しかし，なにしろ命令が命令でありますので」

ジェシー・オドノヴァンは夫に付いてプラットホームを行ったり来たりしていたが，彼の腕をつかんで言った。

「どうしたの，あなた。列車がすぐに出発しなかったら，あなたは船に乗り遅れるでしょ。どうして発車しないの」

「ああ，例によってまた政治だ。ぼくは神に誓って言うよ。人間は天寿を全うする前にあの世に行って，政治などなにひとつない完全君主制の国に住む方がずっとましだと。でもぼくはまだ諦めない。すべてを投げ出す前にもう一度やってみる。このあたりのどこかに娘はいないか，可愛らしい顔の娘は」

「売店に若い娘がいるわ」ジェシーは言った。「でもそんなに可愛くはないわ。どうして娘が必要なの」

トムは売店の方をチラリと見た。

「あの娘じゃ役に立たない。みんなあの娘のことは知っている。それにあの娘じゃ役柄にふさわしくない。でもぼくは，ぼくが欲している娘がどこにいるか知っている。おまえ，切符売り場に走って行って，ダブリンまでの三等の往復切符を２枚買って来てくれないか」

彼は妻をプラットホームに置き去りにして，列車の後ろから線路に飛び降り，そこを横切り，反対側のプラットホームに上がった。妻は，彼が駅の門を抜け街に向かって走って行くのを見た。忠実で従順な妻だったので，彼女は，夫が娘を，可愛らしい顔の娘を捜して一目散に駆け出して行ったと知っても悩むことなく，切符売り場に行って切符を２枚買った。

トム・オドノヴァンは百メートル弱を猛スピードで走って，小さなタバコ屋に入った。カウンターの後ろには娘が，若くてとても可愛らしい娘がいた。彼女は，優しい訴えるような目で，そのおどおどしてたおやかな見かけが，最初のうちは多くの男性の哀れを誘い，それから愛情を起こさせるようなタイプの娘だった。

「スージー」トム・オドノヴァンは息を切らしながら言った。「２階へ駆け上がって，一番いい服を着て，一番いい帽子をかぶって，君が持っているリボンと首飾りを全部付けてきてくれ。できるだけ可愛らしく見せてくれ。しかし10分以内に済ましてきてくれ。それから君のお父さんを連れて来てくれ」

トム・オドノヴァンは大事な常連客だった。スージーは10歳の時から彼が非常に感じの良い紳士であることを知っていた。彼女は，彼が急いでいて，何か切羽詰った重要な出来事があるのだと悟った。彼女はなにひとつ尋ねることなく，彼に言われるままにした。２分後，彼女の父親が後ろの部屋から店に入って来た。

「ファレリーさん」トム・オドノヴァンは言った。「あなたの娘さんを４時間ばかり貸して欲しいのです。ダブリン発の最終列車で連れて帰って来ますから」

「オドノヴァンさん，もし私にそんなことを頼むのがあんた以外の紳士じゃったら，わたしゃ，そいつを店から蹴飛ばして追い出してやりますわ」

「ええ，ご心配なく。私の妻があなたの娘さんにずっと付いていて，無事に連れて帰って来ますから」

「オドノヴァンさん，わたしゃ，なんであんたが娘を必要なんか尋ねたりしません。でも，あんた以外の紳士じゃったら尋ねますがな」

「私はあなたの娘さんを妻と一緒にダブリンまで連れて行って，次の列車で連れて帰りたいのです。時間さえあればすべて事情を説明したいのですが，時間がないのです。ただ言えることは，もし娘さんを借りることができなければ，きっと私は年に千ポンドの稼ぎを失ってしまうということなのです」

「もうそれ以上何も言わんで下せえ，オドノヴァンさん。そんなことでしたら，あんたと奥さんにゃあうちの娘を好きなだけ貸してさしあげますわ」

スージーは驚くべき早さで着替えた。美しい青い帽子をかぶり，ほとんど新品のワンピースを着て，３つの首飾りを付けて，６分で店に戻って来た。

「さあ行こう」とオドノヴァン。「１分たりとも無駄にはできないんだ」

ふたりは早足で駅まで歩いて行った。

「スージー，ぼくは君を誰も乗っていない車両に連れて行く。そこに乗ったら隅の席に座って泣いてくれ。もし泣けないんだったら……」

「やろうと思えばできるわ」

「よし，それはいい。それじゃ泣いてくれ。目を赤くして，顔を腫らして，できたら涙が頬を伝わるように。そして私が君のところに戻って来たらすすり泣きをしてくれ。誰から話しかけられてもひと言も答えるんじゃない。その代わりにバイクのエンジンのように音を立ててすすり泣いてくれ」

「分かったわ」

「もし君がそれをうまくやりおおせたら，ぼくは明日ロンドンで最上等のブラウスをお土産に買って来てあげるから」

ふたりは駅に着いた時，プラットホームから飛び降り，鉄道を横切って列車まで行った。トムは誰も乗っていない三等車両のドアを開けスージーを乗せた。それから彼は列車の後ろ側に回り，向かいのプラットホームに飛び上がった。

彼は兵士たちが座っている車両までまっすぐ進んで行った。

「軍曹殿，２，３分席を外して私と一緒に来ていただけませんか」

軍曹は，列車がいつまで経っても出発しなくて待ちくたびれており，部下たちに席を動かぬよう命じた。そして彼は立ち上がり，トム・オドノヴァンについて行った。トムは彼をスージーが座っている車両に案内した。娘はトムが離れている間見事な演技をしていた。目を真っ赤に泣きはらし，頬は涙で汚れていた。濡れて堅く丸くなったハンカチを手に握っていた。

「その娘をご覧になって下さい」とトム。

「かしこまりました」軍曹は答えた。「何かトラブルに巻き込まれている様子であります」

「娘はこのうえなくひどいトラブルに巻き込まれているのです。彼女はダブリンに行く途中なのです。いや，正確に言えば，この列車が動けばの話です。彼女はコーク行きの郵便船に乗るつもりだったのです。彼女は明日の朝コークで結婚式を挙げて，クイーンズタウン[5]を午前10時半に出る船でアメリカに行く予定だったのです。今のままでは，勿論すべてが台無しです。彼女はダブリンにもコークにも行くことができず，したがって結婚式も挙げられないのです」

スージーはこの哀れな話を聞いて，体を震わせてすすり泣いた。

「それはとても悲しいことです」とトム。

軍曹は，思いやりのある，心の優しい若者で，スージーの可愛らしい顔を見て，強く心を動かされた。

「たぶん彼女の若い婚約者は待っていてくれるでありましょう」

「それができないのです。実は，娘の婚約者は復員兵士で，この前の戦争でずっと戦い続け，ヴィクトリア十字勲章[6]を授けられたのです。それで『シン・フェイン』[7]から，もし明日の正午までにアイルランドを出て行かなければ撃ち殺すと脅迫されているのです」

スージーは激しく，強烈に泣き続けた。軍曹は深く心を揺り動かされた。

「それはまことに残酷であります。しかし私の受けました命令は……」

「私はあなたに命令に背いて欲しいと申しているのではございません。ただこのような場合，その哀れな娘と，そして彼女と結婚したがっている勇敢な兵士のためにも……よろしいですか，彼はあなたの同志なのですよ，軍曹殿。あなたはフランスで彼と一緒に戦ったかもしれません。少しばかり融通を利かせていただきたいのです。ちょっと耳を貸していただけませんか」

トムは軍曹を客車のドアから引き離し，ヒソヒソ話をした。

「そのようなことでしたら，可能であります」軍曹は答えた。「私の受けました命令はその点に関しては異論はないと思うのであります」

「私の提案通りにしていただけますか。それでは私は車掌と話をつけて参ります」

トムは車掌と機関士が駅長室で事態の進展を待っているのを発見した。ふたりはスージーが乗っている車両まで快くトムについて行った。ふたりは，トムが彼らに話すことを深い感動を覚えながら聞いた。それは彼が軍曹にした話と寸分違わなかったが，今度は，花婿は，敵意に満ちた「ブラック・アンド・タン」[8] に命を狙われているアイルランド義勇軍[9] の指揮官であるという点だけが異なっていた。スージーは前と同じように激しく泣いた。

「そりゃあ残酷なことですなあ，まったく」車掌は言った。「その若い娘をダブリンに行かせてやる方法さえあればいいですがなあ……」

「ひとつだけあります。それはこの列車を出発させることです」

「それは不可能です」と機関士。「たとえアイルランドのすべての娘たちが結婚したがってもです。イギリスの武装軍人たちが乗っている限りは……」

「しかし彼らは武装していませんよ」とトム。

「マイケル」機関士は車掌に尋ねた。「おまえ，兵士たちは銃を持っていて，頭にヘルメットをかぶっていると言わなかったか」

「そん通りじゃ。わしゃ真実をおまえに教えたつもりじゃが」

「私が見た感じでは」トムは言った。「兵士たちはまったく武装していません。休暇でダブリンに向かっている何の害も無い男たちのように見えます。恐らくきっと彼らも結婚式を挙げに行くのでしょう。勤務時間中でないことだけは確かです」

機関士は頭を引っ掻いた。

スージーはトムのウィンクに鼓舞されて，絶望的な泣き声を上げた。

「もしその通りだったら」機関士は言った。「勿論，話は違ってきます」

「一緒に見に来て下さい」とトム。

軍曹と彼の部下たちは彼らの座席に座ってタバコを吹かしていた。頭には何もかぶっていなかった。ほとんど皆上着のボタンを外していた。彼らのうちのひとりが歌を歌い，他の兵士たちも声を合わせていた。

「メアリー，ジェーン，ポリー
いっしょにお茶に行こう
楽しいよ，楽しいよ，楽しいよ」

ライフル銃はどこにも一丁も見あたらなかった。

「どうです」とトム。「自分たちの目でご覧になって下さい。この若者たちを軍人と言えますか」

車掌は，確かに兵士たちが駅の中に行進して来るのを見ていたので，戸惑った。しかし機関士は，何かの誤解があったのだと確信した様子だった。

「分かりました」と機関士。「その若い娘と，彼女と結婚したがっている勇敢な若者のために私はこの列車をダブリンまで走らせましょう」

「それでは急いで下さい。あなたの愛するこの老機関車を精一杯走らせてやって下さい」

機関士は席に着いた。「発車オーライ！」車掌は出発の合図の笛を甲高く吹き鳴らした。トムは妻の腕をつかんだ。

「スージー・ファレリーと一緒に列車に乗ってくれ。彼女の涙を拭いてやってくれ。そして，私は彼女に，ピンクか，青か，あるいは他の何

色でも彼女の好きな色のシルクのブラウスを5ポンドで買ってきてやるからと伝えてくれ。ぼくたちがダブリンに着いたらすべてを説明する。ぼくはおまえと一緒には行けないんだ。車掌はまだ半信半疑で，ぼくたちが一緒にいるのを見たら疑いを深めるだろう」

トム・オドノヴァンはキングスタウン発の郵便船に間に合った。なんとか間に合った。彼は，マナーズ氏の機械をアイルランドで販売する代理店契約を手に入れた。彼は恐らく金持ちになるだろう。しかし彼がイギリス国会，あるいはアイルランド国会の議員になるとは思われない。彼は，政治はビジネスの妨げになるといつも言っている。

注

1）George A. Birmingham, *Pleasant Places* (London: William Heineman, 1934), p.3.

2）バーミンガムがアイルランドの政治と関わり，ダグラス・ハイドと知り合い，ゲーリック・リーグに加盟するまでの経緯は，*Pleasant Places*, pp.178-184に記されている。

3）R.B.D. French, "Introduction", George A. Birmingham, *The Red Hand of Ulster* (1912; rpt., Irish University Press, 1972), ix.
P..J. Kavanagh, *Voices in Ireland: A Traveller's Literary Companion* (London: John Murray, 1994), p.13.

4）「キングスタウン」(Kingstown)はダブリン南部の港町である。元はダンレアリー(Dun Laoghaire)と呼ばれていたが，1821年イギリス国王ジョージ4世がこの町を訪れたことからキングスタウンと呼ばれるようになった。しかし，1922年アイルランド自由国(Irish Free State)の誕生に伴い元の名前のダンレアリーに戻った。

5）「クイーンズタウン」(Queenstown)はコーク南部の港町である。1849年にイギリスのヴィクトリア女王がこの町を訪れたことからクイーンズタウンと呼ばれるようになった。1840年代半ばから1950年代初頭にかけ多くのアイルランド人がこの港から船で発ちアメリカに移住した。1912年，タイタニック号の最後の寄港地でもあった。1922年に元の名前のコーブ(Cobh)に戻った。

6）「この前の戦争」とは第一次世界大戦(1914年～1918年)を指す。「ヴィクトリア十字勲章」(Victoria Cross)は1856年ヴィクトリア女王によって制定された武功勲章である。戦争での最高殊勲に対して授与される。

7）「シン・フェイン」(Sinn Fein, ここではSinn Feiner)は1905年アーサー・グリフィス(Arthur Griffith)によって結成された，アイルランドの独立を目指すナショナリスト政党である。1918年のアイルランド総選挙では圧倒的勝利を収め，翌年国民議会を結成し独立宣言を行った。これを機にイギリス＝アイルランド戦争が起こり，1922年に南の26州から成るアイルランド自由国(イギリス連邦内の自治領)が誕生する。1948年のアイルランド共和国誕生後は，北アイルランドにおいて独立を目指して活動を続けている。

8）「ブラック・アンド・タン」(Black and Tans)はアイルランドの独立反乱を鎮圧するための警備兵であった。第一次世界大戦後，職のないイギリス陸軍兵士がこれに応募した。黒色とカーキ色を織り交ぜた制服が，ブラック・アンド・タンと呼ばれる猟犬に似ていたことからこのニックネームが付けられたという説が主流である。

本稿は，2005年度日本学術振興会科学研究費助成による研究成果の一部である。